

図1：戊申字印本『東國通鑑』巻之36

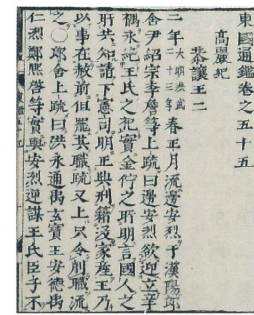


図2：和刻本『東國通鑑』巻之55

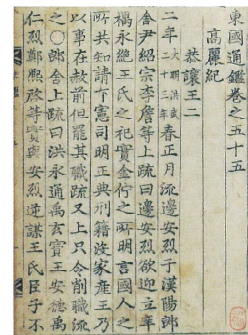


図3：戊申字印本『東國通鑑』巻之55

◆江戸時代の日朝外交に活用された歴史書

朝鮮古活字「甲寅字」は、ハンデル創設者の四代国王セジョンの命で一四三四年（甲寅）に初めて鑄造された。そして鑄造と出版を繰り返して、一七七七年の二十二代国王正祖の命による丁酉字（一六鑄甲寅字）まで鑄造（一六鑄甲寅字）まで鑄造される続けた。実に四世紀に渡り愛用された朝鮮を代表する古活字である。

掲出本は高麗時代末期までを記録した歴史書『東國通鑑』戊申字（一四鑄甲寅字）印本と、和刻本『東國通鑑』である。

『東國通鑑』は九代国王成宗の命により一四八五年に鑄造間もない「甲辰字」

で初めて出版された。しかし、甲辰字は本書出版には不向きで印刷部数は少なく流布されなかった。その後、後に初鑄甲寅字で刊行された。やがて、この二種の活字印本は日本に将来し、甲辰字印本は加賀藩四代藩主前田綱紀（一六四三～一七二四）に、初鑄甲寅字印本は水戸藩二代藩主徳川光圀（一六二八～一七〇一）の蔵書となった。光圀は広く日朝外交に役立てようと、これを底本に忠実に書き取り、欠損等不明箇所は前田家所蔵甲辰字印本で補い、点を付け、一六六七（寛文七）年に京都の書肆松栢堂から出版した。

和刻本は初鑄甲寅字印本

を底本にしたため、「目へんに月」の「明」字がほぼ全巻に見られる。（図2）一方、戊申字印本には再鑄甲寅字以降新たに作られた「明」字（図3）や甲寅字系統の特徴をなす「將・時」字（図1）が見られる。

甲辰字で初刊された『東國通鑑』は、日本や朝鮮で繰り返し刊行された。これは自国史と日朝外交史を理解させる善隣友好の一助となった。世界平和の為には、自国と他国の歴史をも理解してこそ、対等の外交が築かれると、光圀は江戸の世から現代の世界へメッセージを伝えている。

（天理図書館 南田尚紀）

＜天理図書館のお知らせ＞

Tel 0743-63-9200 URL <https://www.tcl.gr.jp/>  
 ◇平日（午前9時～午後5時半） 土・日・祝（午前9時～午後4時半）  
 ○8月の休館日：7日・11日～17日・21日・28日・31日  
 （本欄にて紹介した名品の閲覧については係へお尋ねください）  
 ※最新の情報については公式HP、Twitterでご確認ください。

▶【とうごくつがん】

56巻／徐居正〔等〕奉命撰  
 22冊 32.6×20.8cm  
 戊申字印本

